100年先を読む―52

先入観念を打破すれば異質な未来が出現する

東京大学名誉教授
月尾嘉男

常識を否定した成功事例

消滅都市が流行している現在、山奥の豪雪地帯で居住人口一人の集落といえば、だれもが近々完全に消滅すると想像する。ところが現実に人口二人の集落に国内だけではなく、外国からの来客も合計して毎年一二〇〇人近い人々が来訪する場所がある。国内の恐竜の化石の八割以上が発掘されていることで有名な福井県勝山市の中心から、山道を約二〇分の石川県境に隣接する谷間の急峻な斜面に展開する小原集落である。

かつては五〇〇人以上が林業と養蚕で生活していたが、いずれも衰退して村人は流出し、住人不在の民家は豪雪で次々に崩壊し、集落も消滅寸前になっていた。自分が子供時代に生活していた故郷を維持したいと都会から帰郷した國吉一實さんが、福井工業大学の教授や学生と協力して倒壊しそうな民家を修復して宿泊施設とし、エコツーリズムを企画したところ人気となり、多数の人々が訪問する場所になったのである。

小原集落が象徴するように、二五年前には約一兆円規模であった日本の林業は、最近では四〇〇〇億円程度に縮小している。そして二〇ヘクタール以上の大規模林業家の年間収益が一〇万円から五〇万円という想像できない数字があるように、完全な衰退産業である。ところが、高知の四万十川流域の森林で、まったく林業の経験のなかった二人の若者が林業を開始し、毎月四〇万円の収入を確保しているという驚嘆する事例がある。

秘密は自伐式分散型林業である。衰退する林業の再生を目指した政府の政策は、小規模の森林を集約して大規模にし、委託された森林組合が大型機械を使用して皆伐する委託式集約型林業であるが、それは初期投資が過大になり成功しなかった。そこで民間の発案で登場したのが、森林の持主や借主が自身で小型機械を使用して間伐し販売する林業で、少額の初期投資と簡素な林道で伐採できるため、十分な収入を確保できたのである。

期待を裏切る世界遺産

日本各地で世界遺産への登録が加熱している。貴重な自然環境や文化遺産を保護する意味では重要であるが、大半の地域は観光などによる地域振興を期待している。ところが登録された世界遺産の訪問者数を調査してみると、意外なことに登録されて以後は減少している世界遺産が多数存在する。登録された時期の訪問者数を一〇〇とすると、屋久島は八年後に九〇、知床半島は六年後に六八、富士山は三年後に五八といずれも減少である。

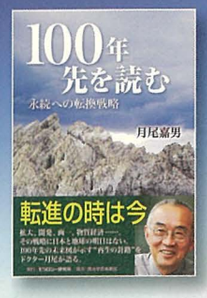
文化遺産についても、姫路城は九年後に七一、法隆寺は九年後に六〇、厳島神社は八年後に七七、熊野古道は七年後に八四、石見銀山は六年後に七二である。もちろん白川郷は七年後に二〇〇、琉球王国の遺跡は四年後に一一六という事例もあるから、すべてではないが、日本の世界遺産の大半は地域の期待を裏切っている。

その原因の詮索は本論の目的ではないので省略するが、流行に便乗しても成功するわけではないことを証明している。

裏道に花開く山桜

これらの事例からの教訓は、減少すれば衰退する、拡大すれば発展する、流行すれば成功するという先入観念や常識が絶対ではないことである。反対に、それらを打破した二例が成功したのである。個人が自室を使用しない期間を貸出すというサービスをインターネットで仲介する「エアビーアンドビー」が管理する部屋は世界一九〇か国に八〇万室以上になり、創業七年で世界最大の室数のホテルチェーンになっている。

世界を網羅するホテルチェーンは巨大資本と吸収合併で実現するという先入観念を打破した成果である。千利休の「人の行く裏に道あり花の山」という有名な言葉は投資の秘訣としてだけではなく、新規ビジネスを開始する要諦でもある。もちろん、巨額の資金と多数の人材で表通りを進行することも否定するわけではないが、それほど流布していない後半「いずれを行くも散らぬ間に行け」を失念しないことが重要である。



絶賛発売中!!
ご注文は添付のハガキで